◆鈴鹿のタウン誌が「フランス特集」　6月号
三重日仏協会の活動も紹介

鈴鹿市を中心に76,000部余を発行しているタウン誌『鈴鹿magazine』が、同市とフランス・ルマン市との友好都市締結25周年を記念して、６月号で４ページにわたる「巻頭フランス特集」を掲載しています。記事ではルマン市の紹介と友好都市締結の経緯、当時の鈴鹿市長・衣斐賢譲氏や、鈴鹿モータースポーツ友の会役員でかつてルマン24時間レースで活躍した福山英朗氏のインタビューのほか、「日仏・市民の交流」のタイトルで三重日仏協会の歴史や活動を６葉の写真とともに紹介しています。

6/9　ドミニク・ドゥーセさん父娘が郷里のノルマンディで出店
Boulangerie-Pâtisserie "Bernard Delafosse"

おなじみのドミニクさんのお嬢さんブランディーヌ・ドゥーセさんからこんな国際郵便をいただきました。＜日本に来て27年、父ドミニク・ドゥーセはその原点に戻ります。これは私との共同事業になるのですが、ブーランジェ・パティシエ「ベルナール ドラフォッスの店」を再開することになりました。この店こそ父が現在の仕事を勉強し始めた原点なのです(…)＞。お店の場所はノルマンディ（ルアーヴルの少し南）リジュー市ビクトル・ユゴー通り。６月９日には開店を祝うパーティーが行われるとのことです。

新店案内状から

アドレスは：13　Avenue Victor Hugo
14100　Lisieux,　France
Email:contact@dominiquedoucet.fr

6/12　フルート・ヴィオラ・ハープ＜魅惑の三重奏＞

本会会員のハーピスト・荒木まどかさんら３人の新進音楽家による意欲的な室内楽コンサート。

日　　時：**６月12日(金)　18:30開演**
会　　場：伊賀市上野市駅前ハイトピア伊賀５階
主　　催：伊賀市教育委員会
出　　演：井伊亮子(フルート)　古味亜紀(ヴィオラ)　荒木まどか(ハープ)
演奏曲目：ドビュッシー作曲　フルート、ヴィオラ、ハープのためのソナタ
小組曲より「小舟にて」ほか

入場無料

(訂正)　前号（donc103号）の新会員紹介の欄で、小林善幸さんのお名前が間違っていました。お詫びして訂正いたします。

[dɔ̃:k]

DONC どんく

N°104 juin 2015　SOCIETE FRANCO-JAPONAISE DE MIE

発　行
三重日仏協会
SOCIETE FRANCO-JAPONAISE DE MIE
〒514-0006　津市広明町418
418, Komei-cho Tsu-shi
TEL
FAX　059－226－2766

7/19　2015年度総会・記念講演・「パリ祭」パーティー
「フランスの諷刺文化の意義」グットマン氏が講演

三重日仏協会2015年度総会と記念講演、恒例の「パリ祭」パーティーを下記のように開催します。今回は記念講演として三重大学教授・ティエリー・グットマン氏に、今年のパリのテロ事件でのフランス人の反応について、私たちの疑問を解くカギとなりそうな時宜にかなったお話をいただくことになりました。

総会では役員の改選ほか大切な議題が予定され、多数会員の出席とご意見を期待します。

また総会議事以外の講演、パーティーは一般公開といたしますので、お誘い合わせて賑々しくご参加ください。

記

◆日　時：**７月19日(日)**
＜受付開始＞　15:00より
＜総会議事＞　15:30～
＜記念講演＞　16:00～
＜パーティー＞　17:00～18:30

◆場　所：**プラザ洞津　２階　明日香の間**（近鉄津新町駅西へ歩３分　059－227－3291）

◆参加費（パーティのみ必要）：**６，０００円**

＜記念講演＞**「フランスの諷刺文化の意義（特に啓蒙的な）」**
講師：**ティエリー・グットマン氏**

＜講師・ティエリー・グットマン氏のひとこと＞
今年１月、テロ事件の対象となったシャルリ・エブド　Charlie Hebdo　はそもそもどんな新聞でしょうか。日本で報道されたような趣味の悪い人種差別的な新聞でしょうか。そこでまず、この新聞の政治漫画などを通じてシャルリ・エブドがフランスの諷刺文化の代表的な存在であるということを説明します。あわせてGrolandという、日本の基準で考えれば非常にきつい笑いのテレビ番組を見て、フランスの諷刺文化の啓蒙的な意義について皆さんと一緒に考えていきたいと思います。

本会の運営委員として長年活躍され、会員から親しまれてきた長田康二さんが、去る２月、55歳で急逝されました。長田さんは津市でウチヤマ酒店を営みながら、ワインアドバイザー全国選手権大会の初代優勝者でもある卓越した能力を生かして、フランスものを中心に広くワインの普及、啓発に努めてこられ、中日新聞夕刊にも「津、日本一の店主死去　今月閉店へ」との見出しで大きく報じられたほどでした。

故人と親交の深かった矢野隆嗣理事の追悼文を掲載します。

長田康二君の死を悼む

矢　野　隆　嗣

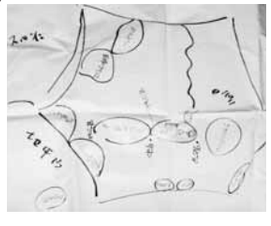
■偲ぶ会

３月29日（日曜）、津駅前の「ラ・フルール」で三重日仏協会主催の「長田君を偲ぶ会」が催された。ワイングラスを静かに傾けながら、参加者全員が彼の思い出を語り、ひとつひとつの話が心に沁みた。私もいくつかの写真を示しながら彼を語った。

■ワインセミナー

１年前の１月27日（月曜）、私は第１回大阪ワインセミナーを主催した。親しい大阪文学学校の生徒や、文芸誌「あるかいど」の同人にワイン愛好家が増えてきていた。彼に話をもちかけたとき、「その中にワインに詳しい人は？」「僕も含めておそらく皆無」「それなら、やりましょ」。即決でまとまったのは、ペダントリーを排する精神。「人があつまって語り合う。その真ん中にワインがある。それが全て」というのが彼の口癖だった。天王寺駅前の旅館「葆光荘」、10畳の和室に38名の参加があり、一部は廊下にはみ出した（写真はセミナー開始前、風呂上がり。左から「あるかいど」同人・奥田寿子、筆者、津市の友人・吉田利明、長田康二）。ジョークや、ときにはフランス語を交え、冴えわたるトークに参加者は魅せられていった（写真：壁に貼った模造紙に書きこまれたワインの基礎知識、フランスの地図）。一時間余りが過ぎたころ、聴衆から「ワインは飲まないんですか？」の質問。きっと彼は高揚していたのだ。持ち込まれたご馳走とワインに舌鼓をうちながら、会場はさらに熱気をおびていった。となりで吉田君が「今日の康ちゃん、輝いてるなぁ」とつぶやいたのを覚えている。

大阪ワイン・セミナー　2014. 1. 27（月）



フランス地図

ワイン入門講座

■書　棚

ワインショップ・ウチヤマの書棚

中日新聞で閉店を知った翌日、ワインショップを訪ねた。知的好奇心のかたまりのような男だった。それを象徴するのがカウンターの向こうにある書棚、思い出に写真を撮らせてもらった。つぶさに見てゆくと、得意だった世界史、日本史の本や、宗教、哲学関係の書籍。目を引くのが、「量子論で宇宙がわかる」（集英社新書）、私の半可な雑学が、彼の好奇心に火をつけた結果だ。ロマン・ロランは井土さん、バルザックは柏木先生の影響に違いない。「ガンガーの風」は「あるかいど」同人・木村誠子の短編集。セミナーの翌朝、「葆光荘」の食堂で、木村さんと彼が長い時間、話し込んでいた。彼女の夫は、口腔底ガンで手術を受けた後、過酷な闘病生活を送り、10年前に帰らぬ人となった（享年55歳）。放射線治療と抗ガン剤のみで、元気に過ごしている長田君をみて、夫に手術を受けさせたことを悔いていると語った。間もなく彼のもとに届けられたのが、この短編集だった。「ぜひ来年も」という木村さんの言葉に元気づけられ、彼は第二回セミナーを心待ちにしていたらしい。「歓喜する円空」梅原猛（新潮文庫）については少し説明が要る。月曜が休みになったので、長田、吉田、矢野の三名でしばしば日帰りドライブに出かけた。奈良、飛鳥、吉野、伊勢志摩が多かった。私が企画したのが「円空ツアー」だった。ワインショップの近くにある真教寺（閻魔堂）から出発して、志摩の薬師堂、少林寺、三蔵寺を巡り、四体の円空仏に出会う旅（写真：三蔵寺）。惹かれるものがあったらしく、次の週に店に立ち寄ったとき、この本が書棚にあった。

三蔵寺、円空仏の前で
2011. 12. 19

■最後のランチ

亡くなる一週間前（２月10日、火曜日）、彼を誘って津刑務所のお隣にある喫茶店「蛮加無」にでかけた。ランチを完食し、彼はさらにケーキを追加した。発病から４年……奇跡が続いているなぁ、と内心思った。最後のランチだったと思うと胸がつまる。

その日の話題が「孤独な鳥の五つの条件」（サン・ファン・デ・ラ・クルス『光と愛の言葉』）。①孤独な鳥は高く高く飛ぶ②孤独な鳥は仲間を求めない③孤独な鳥は嘴を天空に向ける④孤独な鳥は決まった色を持たない⑤孤独な鳥は静かに歌う。「われわれは、さしずめ地べたを這い、群れながら、うるさく歌う鳥だな」と軽口をたたいて笑った。その一週間後、本当に高く飛び去ってしまった。五つの条件を充たす孤独な鳥とは彼だったのかも知れない……と、しばし感傷に浸った。

■おわりに

アフリカでは古老が亡くなると「図書館が一つ消えた」と表現するらしい。いつでも気楽に立ち寄れた大きな図書館が、私の前から忽然と姿を消した。長い交友に感謝をこめて〈合掌〉